上越市立教育センター
246号
所報
令和５年11月２日発行
発行：上越市大字下門前1770番地
上越市立教育センター
所長　竹　内　　学
E-mail jecenter@jorne.or.jp
URL http://www.jecenter.jorne.ed.jp

子どもの悩みに気付く、支える
～“味方になりきる”コミュニケーション～

７月７日に、小・中学校の教員を対象にした「子どもの権利を守る研修」を開催しました。研修では「子どもの安心して生きる権利」を保障する観点から、悩んでいる人に気付き、声を掛け、話を聞いて、必要な支援につなげ、見守る役割を担う「ゲートキーパー」の手法を体験する中で、子どもの気持ちに寄り添うコミュニケーションによって、悩みや思いを引き出し、受け止めるためのポイントなどを学びました。以下に、紹介します。

【子どもの味方になりきるコミュニケーションのポイント（抜粋）】

子どもがSOSを出せるようになるには、「SOSを受け止めてもらえそうだ。」という安心感が前提となります。相談しやすい環境や関係性の構築のために、次のようなことが大切です。

日常生活の中で･･･
名前をセットにしたあいさつ
子どものよさを伝える声掛け
→　OKメッセージ

“いつもと違う”様子に気付いた時
「元気がないようだけど、何か私にお手伝いできることがありますか？」など
→　アイ（私・愛）メッセージ

また、SOSを受けた時には、次の「TALK（トーク）の原則」が求められます。

TALK（トーク）の原則

(1) Tell：言葉に出して心配していることを伝える。
心配しているという気持ちを「（私は）あなたのことが心配です。」と主語を自分にして伝えます。

(2) Ask：「死にたい」という気持ちについて、率直に尋ねる。
どんな時に「死にたい」と思うのか、それはどのくらい続くのか、どのくらい「死にたい」と思うのか、などについて率直に尋ね、リスクを確認することが大切です。

(3) Listen：絶望的な気持ちを傾聴する。
子どもが話し始めたら、まずはひたすら耳を傾けます。そして、「話してくれてありがとう」と、子どもが話してくれたことを肯定することが大切です。

(4) Keep Safe：安全を確保する。（学校でも家庭でも見守る体制）
危険と判断したら、決して一人にしないで寄り添い、他からも適切な援助を求めるようにします。

なお、「一人で抱え込まない」「急に児童生徒との関係を切らない」など、対応の留意事項がありますので、詳しくは、県教育委員会の教職員向けリーフレット（URL: https://www.ijimetaisaku.pref.niigata.lg.jp/pdf/ma-8-12.pdf）をご覧ください。

リーフレット

（担当　学校教育課指導主事　曽根原）

参考　研修資料「味方になりきるコミュニケーション講座」（新潟県ゲートキーパー協会）
教職員向け「児童生徒の自殺予防リーフレット」（令和５年３月新潟県教育委員会）

教育センター

保護者との関係づくり　～想像力＋妄想力＝イメージを膨らませて家族を捉える～

たくさんの課題があふれている昨今、不登校一つをとっても原因や背景は複数の要因が絡んでいることは周知のとおりです。また、児童生徒支援においては保護者とのつながりが欠かせません。保護者も様々な価値観を持っている中、どのように関係づくりをしたらよいか難しさを感じることも少なくないのではないでしょうか。

児童生徒支援において必要なことの一つに、保護者と“チームになる”ということがあります。“チームになる”とは、児童生徒を中心に、保護者・学校・カウンセラーなどの支援者で周りを囲み、立ち位置や役割分担を互いに理解したうえで歩調を合わせて進んでいくことです。

しかし、実際には、お互いに伝えたいことがうまく伝わらなかったり、時には対立構造に陥ったりしてしまうこともあります。

そこで、今回は、お互いの関係づくりのヒントにしていただくため、私が以前、支援者向けの研修会（R4.9 上越市若者支援者研修会）をした際の資料を抜粋して紹介したいと思います。

家庭とのつながり方

- **つながり方が難しい家庭が増えた？**
- **意見をしっかり言える家庭が増えた？**
- **外部の関わりに警戒心？**
- **家庭と学校との関わり方はこの数十年で明らかに変化している。**
- **主義主張・信念があり、「構わないでほしい」と言う家族**
- **主義主張・信念があり、「こうしてほしい」と強く希望する家族**

→ **どう関わっていくか**

1　戦略的な対話

どんなに児童生徒のことを考えていたとしても保護者からすると教職員も含めて周りはみんな“侵入者”です。保護者は「何を聞かれる（される）んだろう」「話を分かってもらえるだろうか」「どう思われているだろうか」と不安でいっぱいです。時には、不信感や怒りを露わにすることもあります。

大切なことは、そうした保護者の「“ニーズ”がどこにあるか」です。そのための情報を収集・整理するには、双方向の対話が重要になります。保護者の話を聞くことも大切ですが、「ただどうですか？と聞かれただけで、何もなかった」とはよく保護者から聞く話です。何のためにどのような情報が必要なのか気を付けて、戦略的に話し合いをしてみましょう。

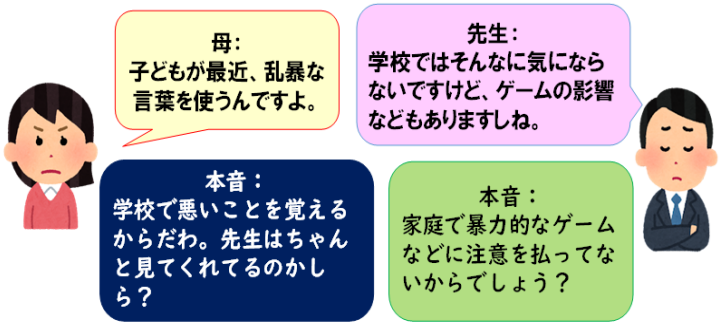
戦略的な対話

- **外部性を意識する。…家族からすると支援者は侵入者**
- **雑談の繰り返しの中で無から有が生まれる**
- **雑談をしながらも、必要な情報はコンパクトに聴き取る**
- **質問に応じる姿勢になっているか確認**
- **どんな質問の仕方であれば、回答が得られるかをアセスメント**
- **回答パターンに沿った質問の仕方を使う**
- **ニーズの把握＝一致ポイントを探す**
  …「関わられたくない」というのも立派なニーズ

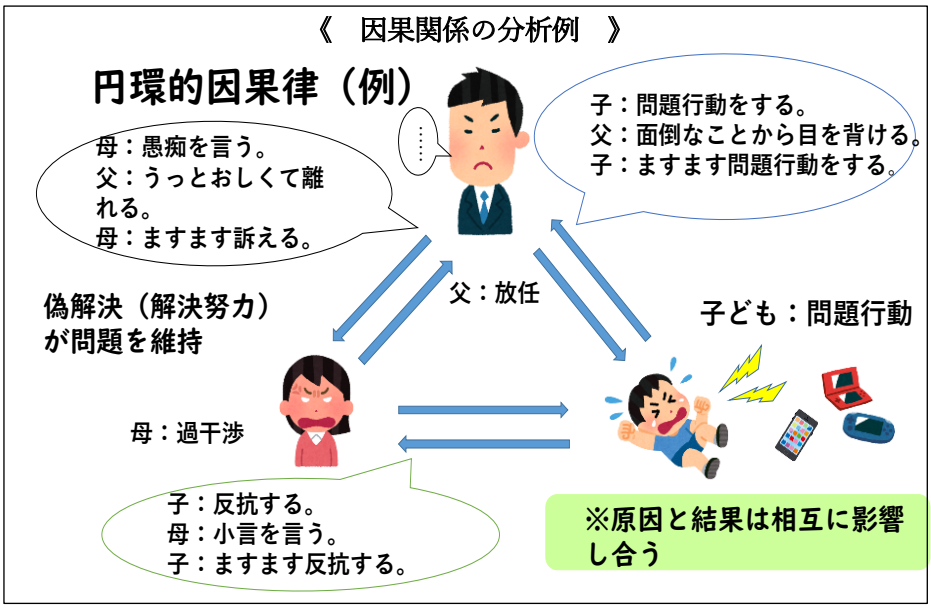
2　表メッセージと裏メッセージ

人は、様々な思いを巡らせて言葉を発します。話した言葉が言いたいことすべてを表しているわけではありません。また、こちらも「含んでいる意味を分かってね」という気持ちで言葉を発することはありませんか？案外、素直な人ほど言葉をそのまま受け止めがちです。実は、意味合いを捉え違いしていることもあります。例えば、「大丈夫」「なんでもない」「もう解決しました」と保護者や児童生徒が発したとしても、それをそのまま受け止めてよいとは言い切れません。言葉の裏にある、本当のメッセージについて「想像力」を働かせてみましょう。

表メッセージと裏メッセージ



- 人と人とのやり取りの中では、しばしばこういうことが起こります



イメージを膨らませて構図を描いてみましょう。

3　円環的因果律

事象の原因と結果は一方通行ではなく、相互に原因にも結果にもなりうることを専門用語で“円環的因果律”といいます。それも平面的ではなく、多次元構造であることも多く、構造をどれだけ分析できるかが試されるところです。

学業不振から不登校になった児童生徒に学習支援をしても、スムーズに学校復帰に至らないのは、こうした構造の複雑性が潜んでいることがあるためです。状況をよく観察し、事象の関係性を紐解いていく必要があります。

「治療抵抗」…治療的な介入を拒むこと

家族療法では、しばしば家族機能の維持もしくは変化への反動として捉えられる

↓

周囲から改善策を提案されたり、支援の手を差し伸べられたときに、消極的・拒否的態度を示す情報を出し渋ることもある

- **見通しが利かないことへの不安**
- **変化への恐怖**
- **直接的なコスト（経済）の負担への懸念、等々…様々な要因が考えられる**

4　治療抵抗

なかなか治療が進まない、あるいは治療を拒否しているように見える状態をいいます。支援する中で、「できることをいろいろ提供しているのに乗ってこない」「連絡を拒否される」といった場面に出くわすことがあります。そこには変化に対する不安や恐怖など、抵抗要因が必ず隠れています。

どんなに客観的な情報を提供しても、保護者からは全く違う風景に見えているかもしれません。保護者には何が見えているのか、理解を深めてみましょう。

私が学んだ心理療法の中で「家族はその家族の一番の専門家である。そこへのリスペクトを忘れてはならない」「支援者も含め、誰も悪者にしない」という考え方があります。客観的、常識的に「少し違うのでは？」と思うことでも、保護者は保護者の文化の中で、その事象に一生懸命取り組んでいます。その常識も本当に正しいかどうかは分かりませんし、見えている世界が違うこともあります。そこを考えるために「想像力」さらには「妄想力」が必要と教えられました。

保護者が支援者をどう位置付け、どうあってほしいと思っているのか、どんな言葉であれば伝えたいことが伝わるのか、ということに考えを巡らせることが大切です。どこまで想像、妄想してもよいのです。こちらが誠意を尽くして「伝えた」つもりでも、保護者に「伝わった」とは限りません。本当に共通理解が図られているか、振り返ってみましょう。

ある高名な外科医は、「常に最悪の事態を想定して手術プランを構築する。それをイメージする想像力は大事」と言っています。支援する際にも、同じことが言えます。「想像力」と「妄想力」を働かせ、常に最悪の事態を考えて動くことが必要です。違っていたら、それは最悪よりは少しマシですから、想定を良い方向に再構築すればよいのです。

児童生徒がその子にとってより良い方向に進めるように支援する…保護者も学校も支援者もその目標は同じはずです。しかし、それぞれの思いや文化の違いから発生した少しのズレが、大きなトラブルに発展することもあります。それを防ぐためにも「想像力」「妄想力」を活用し、保護者の言葉、態度の本当の意味を理解しようとすることが大切です。そして、ズレの程度を捕捉し、修正すべきは修正し、動くのです。

保護者との関係づくりに悩んだ時には、このように視点を変えて捉え直しをしてみてください。

（担当　学校教育課　臨床心理士長　梶原：臨床心理士・公認心理師）

「カウンセリング研修講座で力量アップ！」～夏期カウンセリング研修～

夏期カウンセリング研修にたくさんの方から参加していただきました。講座及び感想を紹介します。

◆7月31日（月）　通常の学級における特別支援教育　～発達が気になる子への指導と支援の事例から～

講師　上越教育大学教職大学院　准教授　関原　真紀　様

講義の要点

通常学級で教育的支援を必要とする児童生徒は多様で、「障害名」や「特性がある子」と偏った見方や主観により実態把握が適切に行えないことがある。そして「適切な学び」を提供しなければならないことは共通している。しかし、担任だけで対応することは困難である。そこで、特別支援教育の校内体制を充実させること、教師は子どもを理解して「もがきの代弁者」となり、どのような支援を必要としているのかを把握し、対応策を検討することが大切である。

◇感想

生活指導部や研推など今ある組織を活用して学校全体がチームとなって支援していくことの重要性を感じました。特性のある子どもたちの支援を日々模索していますが、校内でどんどん声を上げて同じベクトルで支援に当たるための体制づくりができたらいいなと感じました。

◆8月1日（火）　これから求められる新たな学級づくり　～WEBQU を活用した個別支援と集団育成～

講師　早稲田大学教育・総合科学学術院　客員教授　伊佐　貢一　様

講義の要点

これからの学級づくりでは、インクルーシブ教育にもアクティブラーニングにも共にヒットする学級集団の育成が重要である。

WEBQU は、子どもたちが入力すると、瞬時に分析し結果が可視化できるため、即座に事例検討会を開き、チームで共有・活用し、即時対応していくことができる。

どの子にとっても居心地のよい学級、一人一人がそれぞれ成長できたことを実感できる学級づくりに活用してほしい。

◇感想

ＱＵの基礎から活用方法まで教えていただき、今日は参加できて本当に良かったです。クラスの誰一人もおいてきぼりにしない、みんなが親和的な気持ちでつながれる、自治的な集団。温かいプラスのイメージ、ポジティブな気持ちになりました。WEBQU の良さを校内の職員に伝えたいと思います。

◆8月2日（水）　『新生徒指導提要』が示す生徒指導・教育相談の方向性と進め方

講師　関西外国語大学　外国語学部教授　　新井　肇　様

講義の要点

実効的・組織的な生徒指導・教育相談を推進するには、「児童生徒が主役の学校づくり」や「個性と多様性を基盤にしたチームによる協働の実現」等が大切である。

現在の学校は解決困難な課題を多く抱えているが、通説や経験則に基づく答えに無批判に飛びつかず、正解のない（かも知れない）問いを問い続ける力が必要である。学び合う同僚性を高め、常に一人ひとりの子を見、その子にとって最善を考える教職員集団が求められている。

◇感想

『新生徒指導提要』改訂の背景、これから学校が目指すべき方向性について深く学ぶことができました。

児童・生徒等を支援する教職員集団のあり方や、職員間の雰囲気がとても大事であること、雑談をしながらの情報共有が必要であることを再認識しました。

冬期カウンセリング研修

12月

12 月 25 日(月)　**愛着障害と発達障害の理解と支援**

和歌山大学　教授　米澤　好史　様

12 月 26 日(火)　**学校・家庭・専門機関の連携による不登校対応**

FR 教育臨床研究所　所長　花輪　敏男　様

12 月 27 日(水)　**学校での児童生徒のアセスメントと支援の組み立て**

子育てカウンセリング・リソースポート　代表　半田　一郎　様

詳細は「職員研修案内」及び、今後配信予定（文書管理システム）の２次案内をご覧ください。